

玉類研究から古墳時代像を見直す

奈良県立橿原考古学研究所所長 菅谷 文則

1. なぜ“玉文化”か？

14県で構成している古代歴史文化協議会の設立準備を始める段階で、何を研究テーマとするかが議論された。そのもっとも簡単な考古資料を共通基盤とし、14県に共通して存在する遺構、遺物を研究することによって、全国に共通する古代文化の研究の水準を高めることが出来る。または新しく事実を発見することが出来るなどを考慮して、多くの研究候補から玉類に収斂することが出来た。

その理由は、14県にともに出土品があること。これは外面的な理由であるが、必要な条件であると思う。当初の候補として、古墳時代の鉄刀剣の銘文なども考えられたが、14県の枠を外して47都道府県の単位で見ると、数県で出土しているのみで共通の研究テーマとしてふさわしくない。同じような理由で、弥生時代の銅鐸、青銅製武器などもふさわしくない。こうして玉を共通研究テーマとすることになった。

もちろん、従前の玉に関する研究が、かなり進んでいたこともある。箇条書きにすると以下ようになる。①玉の材質研究が、昭和30年代から進んで来ていて、ヒスイ（硬玉）を富山県と新潟県の日本海岸（現在ではヒスイ海岸として観光地化している）で採取したことが明らかである点。コハクも岩手県久慈産のものが西日本の各地から出土している点が、室賀照子博士の研究で1974年に明らかになっていること（千葉県銚子産などもある）。このヒスイとコハクは、1945年以前は、おのおの東南アジアのビルマ（現：ミャンマー）とモンゴル・シベリアからもたらされたこと、学術的研究ではなく、なんらかの意図をもって述べられることが多かった。

②出雲玉造遺跡の発掘調査などが、1920年代に浜田耕作教授を中心として実施されていたこと。出雲玉造を代表する碧玉、メノウの産地同定と、製作過程研究が進んでいたこと。玉を磨き上げる、いわゆる玉砥石の石材として、和歌山県の紀ノ川南岸の片岩が使用されていたことが研究成果としてすでに発表されていたため、原料石材の移動とともに、生産用具の遠距離移動も研究テーマにできること。

③グリーンタフ（緑色凝灰岩）が、玉以外にも、前期

古墳出土の石製品（鋳形石、車輪石、石釧、その他）の原材料（石材）であり、消費地つまり古墳での研究が進んでいる点。

④韓国出土のヒスイ製勾玉の原材料の産地が、韓国の学界においても日本産であることを肯定する意見が多くなってきた点。全出土ヒスイ製勾玉のおよそ半分前後も出土している朝鮮半島南部のヒスイ製勾玉の研究。天河石（アマゾナイト）、色の濃く深いメノウ（この赤色のメノウは、今日までのところ、日本では石材としての産出地は知られていない。）などを対象に、研究が可能である客観的状況となっていること。

⑤ガラス製玉類の分析が、各研究機関において進んでいること。

2. 研究テーマは？

このような状況があり、14県の担当者は一致して玉の研究をしてみようと決定した。玉の生産技術を中心とした「玉作り」と、記紀風土記（逸文を含む）、古語拾遺、出雲国造神賀詞などが伝える玉との関係も重要な視点の一つであることは、われわれが標榜する古代歴史文化の一つの重要なテーマであるという意識があったのであるが、考古学の手法からどこまで迫ることができるかが問われていると考えて、3年にわたり検討を行ってきた。講演会はその中からテーマを絞り、初年度は「玉作り」を巡る問題、第2年目は玉から古代日韓交流を解明すること、そして今回は玉飾りの変遷、地域的な広がり、その王権や祭祀との関連性をテーマとした。

まず、古墳時代の「玉類」と表現しているものを形態から分類することと、その材質を知ることから始めた。もちろん、その前提として各県において出土した玉類の数量を確認した。県保有のみならず、市町村、時には個人や美術館所蔵品、国有となっている玉類の総数の把握に努めた。考古学では、集成という（註）。

一例をあげると2015年6月現在の集成では、奈良県下の244基の古墳と、31ヵ所の集落遺跡から、約7万個が出土していることが判った。その素材は、ガラス約74.8%、滑石類16.9%、土製3.8%、碧玉1.5%である。他約3%に、金属、グリーンタフ、コハク、メノウ、

ヒスイ、埋木、オパール、鉄石英、その他がある。銀の勾玉にガラスを加えたものもあるが、一般的に知られている玉類の素材は、おのおの1%にも満たない。奈良県以外の地域においても、ほぼ同じ傾向であった。おもな素材、つまり原材料を表示しておく(表1)。

玉を形態から表2のように分類したが、いわゆる異形としているものも多い。異形が生産された要因はいくつか考えられる。①原石の形態が、歪であったために異形となった。②工人が見様見まねで製作したために異形となった(伝聞にのみ基づいていて、典型例を知らなかったため)。③工人が何気なく、または特に意図せずに製作した。現在の芸術家が同巧よりも異曲を求めるに近い感覚で製作した(これは、一般的には古代社会において認められないと思うが!)④その他。

このことを理解するために、弥生時代のガラス製勾玉を例としてみよう。弥生時代の開始の頃の佐賀県唐津市葉畑遺跡では、ヒスイ製のC字形の勾玉と異形勾玉とが出土している。その後の弥生遺跡では典型的なものがほとんどである。弥生時代中期に福岡県春日市須玖岡本遺跡から長さ4.8cmの典型的な深緑色のガラス製勾玉が出土している。これは、ヒスイ製の勾玉を模して、新しく技術導入されたガラスで製作している。ヒスイを越えたガラス製勾玉の誕生であったと言ってもよい。容易に入手できる材料で代用品を作ったものではなく、ガラス工人らが、人々が珍重する深緑色のヒスイ製勾玉以上の玉を目指したものであると考えるべきである。その後のガラス製勾玉はヒスイの深緑色を追い求めるのではなく、コバルト色、さらには浅いコバルト色も作り出す。時には、黄色、白色、こげ茶色などのものも、ごく少数ではあるが製作している。

もう少し勾玉について記す。大和では、出現期古墳には玉類の副葬はない。前期古墳の桜井茶白山古墳以降に玉の副葬が始まった。ヒスイ製勾玉には、頭部の孔から、勾玉頂部に2本と、アゴとも言うべきところに1本の3本の線を彫り出した丁字頭勾玉がある。昭和30年代の私が学生であった頃には、丁字頭勾玉はより上級のものと、なんとなく認識されていた。出土状況の確実な例を通覧すると上級のものとは、必ずしも言えないと思う。製作地の違いなどの視点からの検討が、今後のテーマでもある。

3. 大和の勾玉の所有形態

奈良盆地の大形古墳を見ると、前期古墳の桜井茶白山古墳、メスリ山古墳などには、長さ3cm以上のヒスイ製勾玉があり、色もいわゆるヒスイ色のものが多い傾向にある。ところが、小形の前方後円墳である新

沢千塚500号墳では3cmよりも小さなヒスイ製勾玉3個、大きなメノウ製勾玉10個、水晶製勾玉3個が出土している。奈良県下の古墳での勾玉出土数の多い例である。古くに破壊されていて詳細が判らない宇陀市澤ノ坊2号墳では20個のヒスイ製勾玉が出土している。そのうちの1個は、2個の勾玉が側面で接続している異形のものであるが、そのすべてが小さい。中期初頭の大形古墳の鳥の山古墳では、埋葬施設内からは勾玉が出土していない。古い時代に乱掘されていた巨大前方後円墳の巢山古墳の箱式石棺から出土したと報告されている勾玉は滑石製で、頭部に綾杉文を飾ったものである。中期古墳でも早い時期の室宮山古墳では、大量の滑石製勾玉が出土している(出土状況は乱掘のため不明)。ヒスイ製勾玉はヒスイでも白灰色のもので、丁字頭のもは、碧玉製である。滑石製勾玉が出土した桜井市池之内5号墳でも大形の勾玉は、蛇紋岩製であった。

ところが、小形の古墳からはヒスイ製勾玉が出土している。被葬者は海外から単独で来日した人物が推測されている新沢千塚126号墳では、ヒスイ製小形勾玉4個と外来系の金・銀空玉、金箔入りサンドイッチガラス玉、雁木玉などが出土している。周知されているように、この古墳からはガラス製埴・皿などとともに金製品が多数出土している。新沢千塚323号は、後期後半の木棺直葬墓であるが、メノウ製勾玉13個と、水晶製勾玉14個を一連とした玉類が出土している。また純金製(いわゆるムク)の耳環1対が出土していて、被葬者の出身地が議論の対象となる古墳である。ヒスイ製はない。

大和を中心としたヒスイ製勾玉について、やや大胆な仮説を提出しておくことにする。纏向遺跡に近い位置のホケノ山古墳、纏向遺跡の北の柳本台地上の黒塚古墳、天神山古墳さらに北東の中山大塚古墳などには、ヒスイ製勾玉を含む玉類が出土していない。大和の古墳出現期には、玉類の副葬(あるいは身体着装)の意識はなかったといえる。次の段階、つまり前期古墳のうちでも前半の桜井茶白山古墳、下池山古墳などではヒスイ製勾玉を含む玉類の副葬が始まる。前期では、後半からはメノウ・水晶・コハクが加わる。

関東から九州までの14県の集成によると、ヒスイ製勾玉は、前期から中期と後期にかけて増加する傾向にあるのが、福岡県、佐賀県である。中期には少なく、後期にヒスイ製勾玉が増加するのが兵庫県、島根県、岡山県である。前期から中期・後期と減少するのが、奈良県、和歌山県、鳥取県、広島県である。中期に多く、後期に減るのが石川県である。先に記した奈良県の古

墳では、大古墳と中小古墳との間にも差異があることがわかる。長さ3cm以上を大形とすると、大形ヒスイ製勾玉と、中小ヒスイ製勾玉との副葬傾向の違いも各県ともに、明確化してきた。全国におけるヒスイ製勾玉の使用（つまり所有）状態の傾向が異なっている。

このことは、ヒスイ製勾玉の原石取得から製品化、そして所有に至るまでには、1つの集約された、あるいは集中的な（管理）形態ではなく、複数の生産から消費地までの方式が幾通りもあり、おのおの入手法が存在したことを強く感じる。

4. なぜ大和ではヒスイ製勾玉副葬が減るのか？

それでは、なぜ、大和の大形古墳では前期末から中期初頭以降は、大形のヒスイ製勾玉を多く所有しなかったのか？

このことについては、2016年12月10日に開催した『第2回古代歴史文化協議会講演会—玉から古代日韓交流を探る—』における韓国慶北大学校朴天秀教授の講演と講演資料にも明らかのように、朝鮮半島南部には多くのヒスイ製勾玉が出土している。その埋蔵量は、5000点前後が推定されている。日本の既出土勾玉の総数は正確には知ることが出来ない（江戸時代後半から明治時代の山城地域や大和北部における凄まじい盗掘による出土品は、世界各地に分散収蔵されている。江戸時代後半以後の三種の神器を崇める傾向も拍車をかけたようである）。あるいは朝鮮半島出土の方が多いかもしれない。ここまで述べると、ヒスイ製勾玉は海を越えた交易財であったことが知られる。

交易財としてのヒスイ製勾玉の交易対象となったのは、4世紀では朝鮮半島南部の、金官伽耶の地域、具体的には福泉洞古墳群と大成洞古墳群である。両古墳群は、倭系文物の出土品数が多く、グリーンタフ製鏃などが出土している。奈良県桜井市池之内古墳群出土石製鏃と酷似しており、生産者は同一工房を推定させるものであった。

2015年現在で、奈良県には玉作り関連遺跡が27ヵ所あり、そのうち16ヵ所は玉作りが確実に行われていたと推認されている（第1回古代歴史文化協議会講演会『古墳時代の玉作りと神まつり』P18）。なかでも大規模で、多種の石材・化石を用いて各種の玉類を製作していたのが、曾我遺跡である。碧玉、グリーンタフ、メノウ、ヒスイ、滑石、水晶など多種類の玉類を生産していた曾我遺跡は、詳しく検討されることなく、大和王権の大規模な玉作工房群であるとされている。ところが、巨大古墳の所在地に政治権力が集中しているとされている研究状況からみると、大和から

政治権力が河内に移って以降に、曾我遺跡は最盛期を迎えている。河内の王朝との関係が微妙であった葛城氏の中心と考えられている葛城地方には大規模な玉作り遺跡は認められていない。鉄などの金属に関する工房を含む遺跡は多く存在している。曾我遺跡においてヒスイが使用され始めるのは、古墳時代中期中葉以降で、水晶、メノウ、コハクが加わる。新沢千塚500号墳に代表されるメノウ、ヒスイ、水晶の三種の勾玉の組み合わせ使用に遅れて始まったのが、曾我遺跡の勾玉生産であった。玉作りの始まりは、C2地区での滑石が中心で、ついで碧玉が増加している。滑石の石材は、吉野川から紀ノ川南岸に片岩の間層として露頭があり、曾我遺跡の玉作りは、ヒスイから始まったものではない。遺跡地の東に位置している式内社天太玉神社がある。この神社は忌部氏の祖神を祀っている。

私は、この曾我遺跡は、地名通り蘇我氏が、葛城氏に隷属していた頃に滑石製玉類生産を小規模に始めたのが、葛城氏没落後は、規模を拡大して行ったものと思っている。忌部氏と蘇我氏の関係は、今後の研究課題としておきたい。奈良県曾我遺跡を大和王権（大和王朝などとも呼ばれている）の中央玉作り遺跡と単純化して考えることは、ヒスイ・コハク・メノウ・グリーンタフなど、奈良盆地周辺に産出しない高価でかつ稀少であった玉作り素材が、原産地（ヒスイなら糸魚川を挟んだ新潟県側と、富山県側の両ヒスイ海岸周辺）から、コハクなら太平洋岸の岩手県久慈から、どのような経路で、曾我遺跡に運ばれたかはまったく未知の研究分野である。ヒスイは富山県・石川県の遺跡でも原材を加工して製品化していることが判っているが、ヒスイのすべてが、海岸線をたどって曾我までやってきたとは速断しないのが、歴史の真実であろう。コハクも同じである。千葉県銚子産のコハクの多くは、東海、近畿までは運ばれていない。

早く、昭和20年末から30年にかけて室賀照子氏によって、提唱されたアンバーロードも具体的なルートを示したものではなかった。静岡県沼津市の大廓式土器は、纏向遺跡に古墳時代初期に至っている最も東端の土器である。近年の研究は大いに進化していて、埼玉県東松山市反町遺跡などの大きな川沿いの内陸部の遺跡や房総半島の太平洋岸、そして仙台市からさらに北方の遺跡からも出土している。この型式の壺形土器は器壁が厚く、土器自体も大きく、一種のコンテナとする見方もある土器である。東北地方の物品を東海まで運搬する一つの手段と見て良い。ただし、運搬物がコハクや埋木であったことを示す資料は全くない。だが、仮説として提示することは許されるであろう。

5. 玉作り遺跡の研究

1927年に京都帝国大学考古学研究室から『出雲上代玉作遺物の研究』が刊行された。それからおよそ30数年を経て、1959年から國學院大学の寺村光晴氏により、石川県加賀市片山津玉造遺跡の3次にわたる発掘調査が行われた（調査団長は藤田亮策〔1892～1960年〕）。1963年に、『加賀片山津玉造遺跡の研究』が刊行された。1966年には寺村光晴氏が『古代玉作の研究』を刊行され、玉作りの研究が考古学の研究テーマとなった。その後、各地の玉作り遺跡の研究が進められた。そして各種の石材から作られる玉類の製作過程が明らかにされた。日本海沿岸（佐渡の鉄石英製玉作りを含む）の研究と、房総半島の玉作り遺跡などが発掘調査された。玉作りの時期も詳しく調査が進められた。これは弥生時代から古墳時代の土器型式の編年研究が進んだことも関係が深い。昭和50年代初期の奈良県桜井市纏向遺跡における出土土器の研究によって、大和の弥生時代から古墳時代の土師器系土器の編年が進み、さらに纏向遺跡からは、北部九州から駿河、近江から北陸地方で焼成された土器が大量に出土し、各地の古式土師器系土器の同時期性が確認された。中期からは須恵器の編年研究が進んだことが大きい。私が大学生であった昭和30年代後半では、古墳出土の器物の共存関係を中心に古墳の年代、つまり編年を考えていたのとは、精密度が各段にあがった。これに埴輪研究が加わった。

こうして、昭和20年代から30年代に三角縁神獣鏡と一部の石製品（鋳形石、石釧、車輪石など）から考えられていた古墳時代4世紀開始説は、ほぼ前提が崩れた理論となった。ただし、今もそう考える人がいることも事実である。

1958年に『古墳とその時代』（古代史研究〈第3、4集〉、朝倉書店）に、奈良県天理市の崇神陵・景行陵と治定されている前方後円墳が、最古の古墳であり、このために天皇系譜が崇神以降は信じることができると書かれていた。両天皇陵は、平安時代後半には、現崇神陵が景行陵のようにされていたことを秋山日出雄氏が、文献史料などから指摘され、不確実な史料情報の使用に警告を鳴らされたが、その後も出版された考古学の概説書は変わらなかった。三角縁神獣鏡は大和王権（王朝）が、各地の玉に配布したとする考え方のフレームは、記紀の崇神、垂仁、景行の神話と、出土品を直接結びつけたものであることを、昭和40年代から私が指摘しているところである（光文社刊『考古学ジャーナル』、同朋舎出版刊『日本人と鏡』などに自説を述べている）。

前方後円墳の成立から全国各地での古墳築造が、中央集権的（地方の特産も中央に集約し、再分配する）なものでなかったかもしれないと思わせる状態が、出雲玉作が製作した碧玉製玉類のうちには、出雲からごく近くにしか分布しないものがあることでも明らかになった。出雲玉作が製作した玉類のすべてが、大和に一括してもたらされる、それらが全国に再分布したと考えることも根拠のない仮説の一つと言うべきであろう。

古墳時代前期から中期の玉類研究は、日本列島各地の古墳が、そうしてその位置に築かれたかという問題を解き知るための重要な研究の切り口であるのかも知れない。

さきにヒスイ製勾玉が、大和・河内などの古墳から減少することの理由として、交易財であると指摘した。朝鮮半島南部の鉄素材を導入するために等価交換されたのが、ヒスイ製勾玉と推定した。新羅（時期によって領域に若干の移動がある）の地域からの凄まじい量のヒスイ製勾玉の出土が、これを示している。高句麗の領域からは、知り得る限り出土例はない。百済では、瑞山・羅州などにおいてヒスイ製勾玉が出土している。朴教授の集成によると百済では合わせて44点出土している。523年に没した武寧王陵には16点のヒスイ製勾玉が出土しているが、頭部に金帽を被せている。

鉄素材以外にも、西アジア産のガラス容器・玉類（雁木玉、トンボ玉、重層ガラス玉）なども、その対象であった。もちろんこれらの小さな玉類のみが交易されたものではなく、布帛（錦なども含めて）などと関連していたことは容易に気づく。鉄とヒスイ製勾玉の交換比率などの研究は、気の遠くなるほど彼方のテーマと思うが、案外早く解明されるかも知れない・・・。

仏教と勾玉の関係も深い。韓国の百済、新羅ともに、王室の寺院、塔から出土している（表3）。

日本でも、奈良県明日香村の飛鳥寺塔心礎周辺から、ヒスイ製勾玉2点、メノウ製勾玉1個、ガラス製勾玉1点と大量のガラス小玉が出土している。古墳からの出土品を見ると、高松塚古墳、キトラ古墳などからは、ガラス玉は出土しているが、勾玉は出土していない。このころから勾玉は仏教用具となっていく。東大寺法華堂不空罽索観音の宝冠には、多数の勾玉が用いられている。正倉院には、金銅幡に勾玉が吊られているなど、仏教の宝物となるが、この時代はきわめて短い。

表1 主な玉類に用いられた素材

種類	名称	色	硬度	主な玉の種類
石材	ヒスイ	濃緑色から緑白色	6.5~7	勾玉・丸玉・棗玉・その他
	緑色凝灰岩	淡緑色	—	勾玉・管玉
	碧玉	濃緑色他	7	勾玉・管玉
	メノウ	赤橙色・白色他	7	勾玉・管玉
	水晶	無色・透明	7	勾玉・切子玉
	滑石	灰色・白色他	1	勾玉・子持勾玉・白玉・小玉・その他
化石	コハク	黄色・赤褐色	2~2.5	勾玉・棗玉
	埋木	黒色	—	棗玉
金属	金	金色	—	勾玉・丸玉
	銀	銀色	—	勾玉・丸玉・その他
ガラス	ガラス	各種		勾玉・管玉・丸玉・小玉・その他
粘土	土玉	土色	—	丸玉

※硬度は一般的数字。モースの硬度による。

『古墳時代の玉作りと神まつり』第1回古代歴史文化協議会講演会資料 2015年 p26表1、『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』鳥根県立古代出雲歴史博物館企画展図録2009年ほかを参照して、玉の素材と主な玉の種類を対比した。



図1 勾玉（異形勾玉の一例（上）と丁字頭勾玉（下））
奈良県宇陀市澤ノ坊2号墳



図2 子持勾玉
奈良県桜井市松之本遺跡

註) 14県の玉類出土古墳・集落遺跡、玉作り関連遺跡の集成については、大部となるため掲載できなかったが、古代歴史文化協議会ホームページの「研究内容・玉出土遺跡データ」に「玉出土遺跡データベース」として現在公開している。ご活用頂きたい。

<http://kodairekibunkyo.jp/> (古代歴史文化協議会ホームページ)

表2 勾玉と玉類の外形による分類

名称	形態	材質	備考
勾玉	頂部に孔を空けたC型の玉	ヒスイ、碧玉、メノウ、水晶、ガラス、滑石、金属など	丁字頭（線刻）をもつものがある。
異形勾玉	頂部と尾部が接続したもの。2個が腹部に接続したものなど。	ヒスイ、滑石など	
子持勾玉	大きい勾玉に小さい勾玉が付けられている。	滑石など	
管玉	円筒形でタテ方面に孔が貫通している。	碧玉、水晶、ガラスなど	
丸玉	球のような形で、中央に孔がある。	碧玉、メノウ、水晶、ガラス、金属、土など	
小玉	小さい玉でビーズ玉に似る。	主にガラス	
臼玉	小さい玉で小玉に似る。	滑石	ガラス小玉を模したか。
算盤玉	ソロバンの玉に似たもの。	碧玉、メノウ、水晶、金属、埋木（うもれぎ）など	
切子玉	角錐体を2個つなげたような形で、断面が六角形のものが多い。主に水晶で作られ、タテ方向に孔がつけられる。	水晶、メノウなど	
棗玉	ナツメの実に似た形の玉で、側面は丸みを帯びている。タテ方向に孔がある。	碧玉、埋木、コハク、滑石など	線刻をもつものがある。
平玉	平らな玉で、表裏面と側面は面取りされている。側面に孔がつけられている。	碧玉、滑石など	
垂玉	不定形なかたちをしており、上端に孔がある。	水晶、骨・牙など	

『古墳時代の玉作りと神まつり』第1回古代歴史文化協議会講演会資料 2015年 p29、『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』島根県立古代出雲歴史博物館企画展図録2009年ほかを参照して、玉の外形（種類）と主な素材を対比した。

表3 百済・新羅地域の寺院出土の勾玉

国名	寺名	勾玉	備考
百済	陵山寺	蠟石製1点	
	王興寺	ヒスイ7点、ガラス1点	577年
	益山弥勒寺	ヒスイ1点	舍利莊嚴具
新羅	皇龍寺	ガラス9点、水晶1点	心礎上面
	皇龍寺	ヒスイ7点、ガラス63点、メノウ1点	心礎下部から根石付近

